

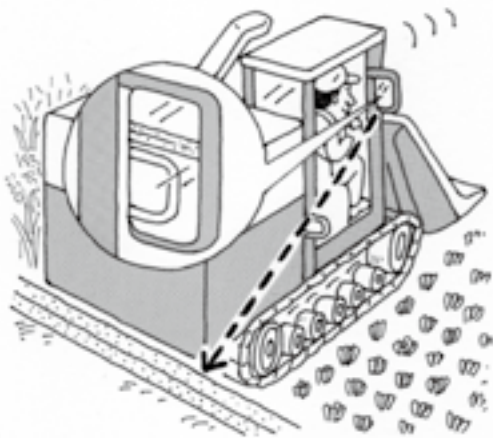


滋賀
から

コンバインのクローラの後ろ端、もじぶじけない

寺元和矢

キャビン付きコンバインでバックや旋回をする時、クローラの後ろ端をコンクリート畦畔にぶつけて傷めた経験のある方、きつとおられるのでは？ そんな悩みを解決するワンポイント



テクニックを、長浜市の稲作農家・前田和宏さんから教えてもらいました。

キャビン右横のミラーから、クローラの後ろ端がどこかわかるよう、グレンタンクに目印をつけるのです。なるほど、これだけのことで圃場からクローラがはみ出ず、バックも旋回もきれいにできます。

「バックカメラで車体の後方は確認できるけど、クローラの後ろ端はカメラには映らないし、ミラーからは死角に入る。でも目印があれば、絶対にぶつけないよ」。前田さんの場合、プラスチック製の黄色い板をリベットで留めて目印にしていますが、自分が確認できれば大きさ、材質は何でもいいそうです。

前田さんはこのアイデア目印を、「後端ここー」とネーミングしています。



島根
から

株元を残してネギの周年連続栽培

見上太郎

益田市の青木昌碩^{まさひろ}さんは、収穫時に株元を残したままにして、青ネギの連続栽培に取り組んでいます。

株間は15cm。黒マルチに棒で30〜40cmの穴をあけ、苗を落として穴底植えです。収穫は高さ60cm、葉が1枚半ほど出たところに地際からハサミでカット。そのままにしておくと、数日後には新しい葉が伸びてきて、2週間ほどで再び収穫できるのだそうです。

品種は九条ネギの系統。収穫したネギの姿は、下に白い部分が少し残る程度の葉ネギ状態。青木さんは学校給食に出荷しており、学校側に「ネギは根っこがなくてもいいよ」といわれて、昨年からの栽培を始めました。一度植えたなら4月の花が咲く時期まで同じ株から何度もほぼ周年収穫できると、最後は掘り上げ

て、次年度の苗として使えるのも気に入っています。春先には分けつもするので、昨年は1ウネ160本ほど植えたところ、今年は2ウネ分の苗が手に入ったと喜ぶ青木さんでした。





あっちの話

石川
から

風船パンツでブドウのハクビシン除け

甲斐弘毅

七尾市の上野道章さんが悩まされていたのは、ハウスの中でブドウを食べにくるハクビシン。木に登るハクビシンの体重は重いネコほどだと聞いて、その重さを利用した仕掛けを考えつきました。

用意するのは100円ショップの水風船、イボ竹、針金です。まず、親指の太さほどの枝を1本の樹から3本選び、それぞれに風船をくくりつけます。次にイボ竹の先端に、両端を少し研いでU字に曲げた針金を固定。風船との間が5mmほど空



くように地面に差し込みます。樹の上をハクビシンが歩くと枝がしなり、風船が針金に触れて破裂。音に驚いたハクビシンは一目散というわけです。ハクビシンは夜行性なので、活動しない日中は針金に軍手をかけておくと、風での誤破裂が防げます。

このやり方を始めたら、全滅だったブドウが余るほど収穫できたとか。ハクビシンが破裂音に慣れると効果が薄まるので、今年は風船の中にトウガラシを入れてみる予定です。



兵庫
から

キュウリの端っこで、大人気のキュウリジャム

上野亮太

多可町の中村集落にある小さな加工場・マイスター工房八千代は、名物の巻き寿司を中心に年商3億円を達成。「もったいない」「見捨てない」がモットーの代表・藤原隆子さんから、キュウリの加工の知恵を聞きました。

巻き寿司は長さ18cm。それに合わせてキュウリの両端は切り落とします。ヘタ側の端は、なんとジャムに加工。名付けて「びつきゅうりジャム」。酸味もあって、お客さんにも「キュウリのジャム?」と間違われるほど、おいしいジャムになるそうです。いっぽう先



ぼ側の端は、ジャムにするには水分多め。こちらは漬物にピツタリとのことです。

キュウリジャムの作り方を教わりました。材料は、キュウリ500g、リンゴ1／4個、砂糖150〜200g、ハチ

ミツ中さじ1、レモン汁1／2個分。キュウリもリンゴもそれぞれミキサーにかけ、鍋に入れて煮詰めます。水分が少なくなったら砂糖を2回に分けて入れ、ハチミツも加える。最後にレモン汁で味を調えたら完成。ぜひ試してみてください。



栃木
から

卵の薄皮が人工皮膚に!?

とのことでした。

那珂川町に住む柴山文夫さんから、面白い話を教えてもらいました。擦り傷ややけどをしたときなど、ふつうは絆創膏や傷パッドなどを貼りますが、柴山さんは変わったものを貼っています。聞いてみると、なんと生卵の薄皮（殻の内側にある薄い膜）でした。「この薄皮が、人工皮膚になるんだ」と柴山さん。

やり方は簡単、生卵を割って薄皮をはがしたらすぐに、洗って消毒しておいた患部を覆うように貼ります。5〜10分もすると乾いて白くなり、傷面にくっついてそのまま1週間ほどとれません。そして患部が治癒したころ、まるでカサプタがはがれるようにこの膜もペロッと取れます。

30年ほど前に近所のおばちゃんから教わって以来、柴山さんはずっとこの方法で治してきた



堀籠勇希